

本年の文展の洋畫に就て

黒田清輝

本年の文展の審査の方針に就ては、文部大臣の談と云ふものが新聞に出て居ましたが、實は五日に正式に訓示がある筈でありますからまだ分りません。洋畫部の實際の狀況は鑑別に臨んで見なくては、今は全く分りません。併し今迄の經驗に依て察すれば年々作品は進歩し出品の數も殖へる、審査の經驗から言つても其程度が年々高くなる、一口に言へば嚴重になる、一昨年より昨年、昨年より今年は嚴重になる事であらうと思ふ。出品の結果から云ふと、數に於いて及第□が次第に減じて行く様な傾向がある、何故かと云ふと、鑑別の時段々擇りに擇るから製作者の技倆から云つても、昨年及第したものも今年は及第せぬと云ふことになる。畢竟出品は毎年多くなるけれど、選ばれた後は少くなる傾があります。

美術と風紀と云ふことが従來兎角別々に取扱はれて居る様であります、私共の考へた處ではさして別な問題ではないと思ふ、甚しく風紀を害するものに特別の美術品はなからうと思ふ、又誰が見ても美術品と見らるゝものは勿論風紀を害する様なものではない。斯う云ふ點も今年は昨年よりも一層程宜く解決されるであらうと思つて居ます。風紀の上から云ふと直ぐに裸體畫が問題になりますが、裸體に就ての議論は其畫の程度問題が一つと、それから國情といふか、つまり其國の一般思想が一の問題で、何處の國でも何時の時代でも、同一の解決がなされる譯のものではない。兎角人は或書物に書いてある様に、自分の生れた時に存在して居るものを最善いものと思

ふと云ふことがある、それで假令へば今日の社會に丁髷の人が居るとすれば非常に異様に感じられる、世間へ顔出しもされぬ程恥づかしい位のものである、併し斷髮令の出た當時には、一般に丁髷であつたから、思切つて斷髮したものは却て見苦しいものでありました。それで美術論はさし置いて習慣の上から、又國民の一般思想の上から着物を着けない裸體畫と云ふものは單に裸體であるが爲に美術の觀念は打消されて了つて、着物を着て居る猥褻の畫よりも以上に排斥されると云ふのは已むを得ないことであります。併し日本の今日の狀態では最早さう云ふ時代ではない、美術品としては一概に排斥すべき時代ではない、唯少しのこだはりが残つて居るのであります。斯う云ふ場合に昔から美術の觀念で裸體畫を見つけて居る自由な思想の所を例に引いて日本に及ぼすことも出来まいけれども、最早や此斷髮頭にも慣れて來て居る今日でありますから、單純に裸體畫がいけないと云ふべき時代でない。要するに總てが程度問題であります。美術家も獎勵家も風教の衝に當る行政官も其邊の理解は充分であらうと思はれるので、從來の様な不體裁な解決はないだらうと想像されます。

洋畫に就ての私の個人の感想は私共初め今迄洋畫と云ふものは斯う云ふ風にして描くものだと云ふことだけをやつて來た様なものであります、之は種々の派の人が皆さうである、古いピチュウム時代から、又印象派の點描畫、又ポストイムプレッション所謂内容を主とする畫も、孰れも皆此方法を講ずる研究或は或主張を發表する試みと云ふ様なこと、兎も角試作時代であつた、またそれが長く續くことであらうと思ふが、一方には試作でない、本當の製作もなければならぬと思ふ。よく個人性と云ふことを口にする人がありますが、それも多くは模倣で本當に個性を出したものはまだ甚だ少い、之からは試作時代を離れて本當の製作時代に入るべきであると思ひます。も

う文展も十年を經過して居る、それで第二期の十年には即ち製作時代に入る第一期と思ふから、今年の文展あたりから追々さう云ふ風な作品が現はれることであらうと思つて楽しんで居ります。(談、文責在記者)

〔美術旬報三四〇大正六年一〇月九日〕

第二回文展(大正六年一〇月二六日〜二月二〇日)をふまえての所感。